

■「稲穂」の由来

枯れ木も山の色添えに

牧内雪彦（中47回・高1回）

六月某日。在京飯田高校同窓会から「会誌編集委員会開催のご案内」なる文書の郵送を受けた。「会誌」発行に向け、編集委員会発足の運びとなりましたので、下記により第一回の開催をウンヌン、是非ご出席をウンヌンとある。

在京総会の出席すらいっぺんもナシの小生、会誌発行の計画や運びについても全然露知らずだったから、まるで不意を撃れた鳩。しかし、追々わかったのだが、これは総会時の動議から、他者推薦によって挙げられた十数名の氏名の中に、小生も混じっていたとのことだった。

もつと若い後輩で気鋭の現役編集実務者も数人いると聞いて安堵。ならば枯れ木も山の色添えになろうと、おぼずと腰を上げた次第である。今はもう執筆から編集・印刷まですべてコンピューターが取り仕切る時代。それは実にまことに驚異の便利機能だが、基本的には過去の



●まきうち・ゆきひろ
昭和6年川路天龍映生まれ。中47回・高1回。早稲田大学卒業後、フリーライター、芸能関係を遍歴。著書に、「燃えろ青春のペダル」（三恵書房）、故郷関係では「郷土講談全10帖」（郷土出版社）、「信州伊那郷土人物講談12話」（南信州新聞社）など。

手づくり手作業と同じである。あの懐かしい活字時代、かなり高度な文化誌から通俗紙にいたるまで、大方のことは経験実績ありの自負を杖として、会場のアルカディア市ヶ谷へと足を運んだのだった。

格調高き言葉、「稲穂（とうすい）」

さて会議は進行し、やがて誌名の検討が始まり、個々に意見を求められたから、小生も寡黙でばかりいられなくなりまして……。

「私はここに列記の候補名から選ぶとすれば『稲穂』がいいと思います。ただし、へいなほ」と読まないで、音読（とうすい）です。それは遙か昔、旧制飯田中学で全校生徒に配布された冊子『稲穂學報』で初めて知った格調高い言葉であります。とうすい。響きもいし字面もいい。実る稲穂の帽章の歌でも親しい文字。とうすい。



飯田高校同窓会事務局に保存されている『稲穂學報』

陶酔にも通じる、これを私は推挙したいと思います」
晴れて、お誕生となる

昭和十八年度入学の一年生。『稲穂學報』を渡され、「トウスイ」という発音を聞いた時の驚愕と怪奇で鮮烈な感動は忘れ難い。十二歳の村童のふんわりと稚い頭脳は「稲穂」をトウスイと読む摩訶不思議さに衝撃を受けたのだ。

その後まもなく、平福百穂というアララギ歌人の名前を知って「穂」を「スイ」とする類例に初めて出会った喜びもまた忘れられない……など。だが、私の訥弁は無反応に終わった。会長で座長

をつとめる同期生の平田達君すら『稲穂學報』の記憶がないのか無音。まして後輩の皆さんに於いておやであった。

ところが終盤になつて、意外にも「稲穂」が再浮上し、「赤石」「高松」など強力な案を押し退け

てしまった。やはり「赤石」がいいよ！と主張する声もあったから、これは満場一致の決定とは言えないけれど、こうして「稲穂」は晴れて、お誕生となったのである。

さて、どう育てるか。まずは編集の方向感覚が問われよう。同窓会誌をジャーナリズムと混同しないよう老木の私は切望する。いま目に浮かぶのは旧制松高OBの文集『縣（あがた）』で、これは畏友篠田益實君を介して頂いた年刊誌（第十集をもって先年終刊）だが、同窓会誌編集の模範だと信じている。

稲穂の一粒として

先日帰郷時、生家の袋戸棚から『稲穂學報』を探し出して読んだが、持ち帰ることは止めた。門外不出というのは小生の頭脳らんごくで、身辺もつとらんごくのため、懐旧資料を持ち出したら必ず行方不明の揚げ句に紛失の前科持ちだからだ。そこで表紙のコピーだけして全32ページを夢中で読み、戦時色きわめて濃厚ながらも不朽の内容と名編集ぶりに感服して帰ってきた。

われらの平成創刊『稲穂』も、幅広い不朽の文苑になるように祈る。そして執筆者の発掘紹介など、微力ではあるがお手伝いしようと考えている。飯田中学・飯田高校で植えられ育った稲穂の一粒として。